

中国の「批林批孔」運動が、たんに林彪反党集団を批判し、孔子思想を批判するキャンペーンではなく、まさに今日の中国共産党中央に存在する深刻な政治的相克を反映したものであることについては、これまで『人民日報』や『紅旗』に発表された諸論調からしても、ほぼ明らかであった。

たとえば、『紅旗』第五号(一九七四年)の余凡署名論文「林彪の反革命的策略の破産——

●外交時評

「批林批孔」運動の現段階

中嶋嶺雄(東京外国語大学助教授)

冊の黒いノートを批判する——」は、「中庸の道」を激しく非難し

「いわゆる『中庸の道』は、実際には反革命の復讐の道であり、陰謀家の人をあざむく道である」

と力説して、林彪が、一方では左傾的なポーズをとって反右傾を叫び、他方では極左にも反対する「中庸の道」を歩んだと論難しているのだが、はたして林彪にこのような批判が妥当するであろうか。林彪以外の人物を暗に含意していることは明らかである。

今日の「批林批孔」運動は、特定の人物への批判を含むものではなく、党中央に分裂や対立はない——と中国側は主張し、それを受けてわが国の新聞も大方そのような方向で解説を試みているが、文化大革命に関しても、九全大会の評価においても、また林彪異変に関しても、そのような見方はすべて誤っていた。

第一、昨夏の十全大会における周恩来政治報告と王洪文の党規約改正報告を比較しただけでも、またこの十全大会がきわめて異常な状態に



において開催されたことを考えただけでも、今日の中国内政に多くの問題があることは明白なのである。

そうであるがゆえに、依然として国家主席や国防部長、総参謀長などの最高人事の空白がつつぎ、あれほど予告されつづけた全国人民代表大会が開催され得ないのである。

はたして、この六月中旬以来、北京をはじめ各地に再び壁新聞があらわれはじめ、「批林批孔」運動の輪郭がさらに明白になってきた。各地の壁新聞は、旧幹部の復権を批判するなど、

脱文革傾向に逆らう反潮流の色彩が濃く、また行政機関としての革命委員会批判が多いことは、その上部機関である國務院と、その責任者(周恩来総理)への批判につらなる可能性を示唆している。

しかも「批林批孔」運動の過程で、江西省や広州では大規模な流血事件が起こり、一部では処刑が行われたことも暴露されて、中国の政治的・社会的情勢が依然として不安定であることがさらけだした。やはり文化大革命から林彪異変にいたるプロセスが、あまりにも深刻な事件の連続であっただけに、その後遺症も根深いのである。

そのようなとき、周恩来総理の活動が低下して鄧小平副総理の活躍が目立ってきている(この問題については、『時事解説』六月八日号の拙稿「鄧小平副首相の活躍」参照)。この点からしても、「批林批孔」運動の行方いかんは、日中関係にも大きくはねかえってこざるを得ないのである。

それだけに、われわれとしては、一時の甘いムードや心情にとらわれることなく、中国の動きをリアルに見つめ、分析してゆかねばなるまい。日中国交前後から大きく転換した中国の対日政策が、状況いかによっては、また再び大きく変化し、厳しい対日姿勢を打ち出してくる可能性も否定できないからである。